

石見地域の幼児の言語についての調査（1）

高橋 純¹ 山下 由紀恵²
(¹総合文化学科 ²保育学科)

A Study on the Speech of Preschool Children in the *Iwami*-area of Shimane (1)

Jun TAKAHASHI, Yukie YAMASHITA

キーワード：幼児，発話，場面，スイッチング，方言
infant, speech, situation, switching, dialect

1. はじめに

本稿は、2012年度に島根県立大学短期大学部の「学術教育研究特別助成金」により、島根県石見地域の東部の保育所3カ所で行った調査の結果の一部を報告するものである。

本報告は、今まで採集させていただいたデータから、どのような意味が読み取れるのか、またそれによって今後の調査をどのように進めていくべきなのかを検討することを目的として、調査内容を絞って、複数の観点から検討を加えた。

まず、調査のデータの生の状態とその印象を述べ、次にデータをまとめる際の観点を検討した。そして、実際の集計結果から考察し、今後の調査の進め方等の検討を行った。

2. 方法

1) 調査データの所見

まず、この調査を行って、発話を聞いた印象として、幼児といえども、大学から来た知らない“おじさん”・“おばさん”の前では、改まった物の言い方をしているのではないかと感じられた。それは、普段本学の学生（18～20歳）と接している際に聞く方

言形の度合いよりも少ないように感じられたからである。

想像するに一般的に幼児の言語環境は、まだ親や祖父母、保育所の先生・友達、それにテレビくらいに限定されていると思われる。そして、調査対象の保育所年長児の親は、本学学生よりも年上であることは年齢上明らかで、印象の差は、年長児と学生達との年齢差によるものとは考えにくい。そうなると、場の条件によって、この年長児達の言語が変化している可能性があると考えられる。

そこで、保育所の年長児達も言語のスイッチングを行っているとして、方言形と共通語形を使い分けている可能性があると考えた。そして、現在、若い世代は、方言での敬語形¹⁾は使用できず、改まった表現をする際には、共通語形を使用することなどを考慮に入れ、方言形と共通語形がどのような基準で現れているのかを分析することとした。

とりあえず、基準として考えられるのは、対人関係である。しかし、対人関係を保育所の年長児が明確に意識しているのか否かが疑問に感じられることもあるので、もう一つ、発話の内容によってその言語が変わるのではないかという仮説も立てた。

年長児では、質問された内容に即答するのは難しいが、自分のことについて語るときは、普段のことば(方言形)が現れやすいのではないかと推測した。

そこで、発話の分類の基準を、対人別・発話内容別として分けて、統計を取ることにした。

2) 調査データの集計

3カ所の保育所に協力いただいて、データを採集させていただいたが、ここでのデータ集計では、データをどのような観点から見るのが可能なかを検討するため、そのデータ整理の観点を決定することが目的である。そのため、何回もデータにあたり、分類基準を変更しなければならないので、採集データを1カ所の保育所のものに絞って、検討をおこなった。

本報告では、2012年10月19日に調査させていただいた江津市立渡津保育所のものを使用する。この保育所では、2005年度生まれの16名の年長児の発話データを採集させていただいた。

調査方法は、高橋・山下(2013)に詳しく記述したが、再度、簡単に記しておく。まず、田口恒夫・小川口宏『新訂版 ことばのテストえほん：言語障害児の選別検査法』(日本文科学社、1997年)という言語障害を判定する絵本を使用して、①そこに描かれている物の名前を発音してもらい、②同書のある場面が描かれているページを見せて、保育所の年長児に何をしているところかを説明してもらった。そして、③紙芝居を2種類用意し、各紙芝居から5枚抜き取って、その5枚から話を作ってもらおうという調査を行った。①～③の調査を1セットとして、4人ずつ4グループに分かれて実施させてもらった。

そして、今回、データとして使用するのは、②と③の文もしくは文章として発話している部分を対象とした。

(1) 対象データ

採集されたデータの最初の部分は、各自に自分の氏名を言ってもらい、調査①では、物の名称を言ってもらっているだけで、文としての発話がないので、

①の調査が終わるまでを、4グループ分で削除し、②の調査が始まることから③の調査が終わるまでを対象とした。

また、集計に用いる際、感動詞や単語1語(名詞)だけで答えている部分は、集計には加えなかった。

削除の基準としては、以下の(例1)のような感動詞や(例2)(例3)のような名詞・指示詞のみの場合は、集計に加えていない。方言形が現れる余地がないからである。しかし、(例4)のように連体修飾が付加されている形式は、名詞句のみであっても集計に加えた。また、動詞句は、接続に関係なく、集計に加えた。

(例1) うん

(例2) お母さん

(例3) これ

(例4) けがしてる子

そして、発話を集計する際に1単位として数える対象は、同一人物が1回に発話するすべてとした。つまり、文という単位は用いなかった。なぜならば、年長児ほどの年齢では、ことばが途中で終わっているものも多く、また、主語と述語を一致させられず、ねじれてしまうものもあり、また途中で別の話題に変わることもあったからである。

(例5) わからん。でもさ、本物のさ、でっかいケーキならまだ本物だけど、ちょびつのかすか、かすだから、だからおもちゃのやつで運んだ。

(例5)のような発話は1単位として、集計する際には、1つとして数えた。

(2) 分類基準

ここでは、集計する際の分類の基準を示す。まず、はじめに方言形と共通語形をどのように判断・区別したかを明らかにする。

(a) 方言形と共通語形

方言形には、名詞を含まなかった。名詞に関しては、知識の問題で、他の単語に置き換えることがで

きなければ、それを使用せざるを得ず、その地域独特の名詞を使用したからといって、方言形とはしないこととした。

しかし、現在の若い世代は、日本全国、発話の多くの部分が、共通語形と共通している。方言は、体系を成しており、共通語と共通の部分も含めて方言であるとすると、今回の調査が行えない。そこで、本調査のデータ内で、両形式が現れたもののみを方言形とした。

例えば、「知らん」と「知らない」が出ているので、動詞の否定の「ん」と「ない」は区別の対象とした。これと同様に、顕著に表れたのは、理由を表す「～けえ」と「～から」、アスペクト形式の「～とる」「～よる」と「～てる」の区別である。動詞として存在を表す「おる」と「いる」も少ないが両形現れた。このように同じ内容を表現するもので、共通語形とデータ内に同時に現れるものを方言形と共通語形として区別した。

ただ判断に困ったのは、「動詞終止形+んよ」という形式で、中国地方では、独特の音調を伴って現れる形式であるが、これだけが現れているものを方言形としていいものかどうか判断が付かなかった。たいていの場合、トル形やケェなどの形式と同時に出てくるが、(6)のような例もあった。今回は、これも方言形としてカウントした。

(6) ええと、この人を見たから怖いから、てっぺんまで行ったんよ。

以下に、この調査の中で、使用されていた方言形を一覧として、まとめておく。

動詞句

- 否定形「ン」多数
- 存在（生物）の動詞「オル」多数
- アスペクト形式「トル形」多数
- アスペクト形式「ヨル形」は、1回「何でボールがつかみよるん。」
- 可能の形「絵がね、これね、かけれんかったけえね。」

助詞

- 理由を表す「ケェ」多数。

- 文末形式「デ」5回「ただ怒ったとき、えんえんえんって泣くんで。」
- 文末形式「ンヨ」多数「●●●●で今度お祭りがあってね、僕のお母さんが仕事場でね、中で踊るんよね。」
- 文末形式「カイナ」1回「これどうやって上がったんかいな。」

(b) 対人別

対人別は、対象の年長児達が、誰に向かって発話しているかを、区別したものである。たいていは、本調査の調査者に向かって発話されているが、園児の答えに園児達が答えることもままあった。また、誰に聞かせるともなく、調査者や他の園児達のことばに反応して、発話するようなものもあった。そこで、対象の年長児達とは顔見知りでない調査者と、その他で、対人別を分類した。

(c) 発話内容別

調査中に対象の年長児達に発言してもらった内容は、もちろん調査に使用した絵や紙芝居の内容についてだが、それ以外にも、調査の最中に、園児達が発言しやすくするためや、また集中力を維持させるために、年長児達自身のことを質問者が聞いた。そして、この調査内容自体に関連したものと年長児達自身について話したことを区別して、分類した。

年長児達は、初めて見たものを説明するよりも、自分たち自身に関連している事柄の方が、話しやすい傾向があるのではないかと、そして、話しやすさというものが年長児達の言語を変えている可能性があるのではないかと、分類の基準とした。

3. 集計結果

集計する際に、先に方言形について述べたが、発話の中には、方言形が現れ得ないような発話も存在した。例えば、(例7)のようなものである。

(例7) 僕ね、ここら辺がすごいしびれる。

(例7)は、文として成り立っているが、結局、

方言形と共通語形が共通の形をしており、方言形を出すことができない文である。このようなものは、共通語形として扱い、統一した。そのため、共通語形が多めに数字に表れている。

それでは、まず対人別の集計結果を以下の表1に示す。数字は発話の回数を表す。

表1 対人別の方言形の出現数 (N=490)

	方言形	共通語形
調査者	107	308
その他	22	53

表1の結果を5%の有意水準で χ^2 検定すると、p値は、0.5206となり、誰に対して発言するかという相手の別と方言形の出現は関係していないことになってしまった。

それでは、年長児達の話す内容によって、方言形の出現の仕方は変わるのだろうか。表2にその出現数を表す。

表2 発話内容と方言形の出現数 (N=490)

	方言形	共通語形
調査内容	78	228
自分の事柄	51	133

表1と同様に表2の結果も5%の有意水準で χ^2 検定すると、p値は、0.5878となり、発話の内容との関係も有意ではなかった。

そこで、方言形と共通語形が共通な(例7)のような例を除いて、集計し直した。

まず、対人別のものを表3に表した。

表3 対人別の方言形の出現数 (N=163)

	方言形	共通語形
調査者	77	64
その他	13	9

しかし、同様に検定かけると、p値は、0.6942で、やはり方言形の出現とその発話対象との関係は統計

的に有意なものではなかった。

つまり、対人関係で、調査対象の年長児達は、方言形を選び取っているわけではないということになる。

次に表3と同じ方法で、発話内容についても集計し直した。その結果を表4として表す。

表4 発話内容と方言形の出現数 (N=163)

	方言形	共通語形
調査内容	61	56
自分の事柄	29	17

表4においても、p値は、0.2076と有意とは認められなかった。

印象としては、明らかに園児達がスイッチングをしており、平素のことばとは違うことばを話していることがわかるが、ここで設定した分類基準では、そのスイッチングを明確に記述することはできなかった。

しかし、言語は、人と人とのコミュニケーションで、聞き手の印象でその言語の質が判断される。誰も、統計的に有意なので、あいつは失礼な言い方もしくは丁寧な言い方をするとは思わない。

つまり、印象として、感じる内容は、正しいとして、その分類基準が、この年長児達のスイッチングを説明できていないとした方がいいだろう。

ならば、どのような要因で、そのスイッチングの基準の判別に至らなかったのだろうか。

そこで、一回の発話の長さに注目してみた。

表5 発話量と発話回数 (650発話)

		発話量 (字)	発話回数 (回)	発話量/回 (字)
対人別	調査者	7542	543	13.9
	その他	1613	107	15.1
発話内容	調査内容	5725	393	14.6
	自分の事柄	3430	257	13.3

表5は、(例1)から(例3)のような形式を除かずに、園児達の発話の回数と一回の発話量²⁾を求めた表である。1回の発話が平均14字前後の長さである。

そこで、14文字以下の発話量と14文字より多い発話量の違いを対人別・発話内容別で調べてみると、表6のようになる。

表6 発話長の場合別出現数 (N=650)

		短い	長い
対人別	調査者	374	169
	その他	60	47
発話内容	調査内容	261	132
	自分の事柄	173	84

このように算出してみると、対人別では、p値が0.01018となり、有意差が見られた。つまり、調査者に対しては、発話量がより短めの発話が多く、園児同士などでは長めの発話が行われることが多いといえるだろう。

しかし、発話内容では、有意とはならなかった。

つまり、方言形は、誰に対してでも、内容によっても、その出現の量は左右されない。そして、発話量に関しては、発話内容によっては左右されていないが、誰に対して話したかということには影響されている。

この結果について考える前に、スイッチングということについて、言及したい。例えば、一般的に敬語の使用に関するスイッチングの基準として考えられるものとして、親疎関係が1つあげられる。年齢差があろうと、そこに親しさがあれば、改まった表現は使用されない。つまり、年長児達の間にも親疎の関係が彼らの言葉遣いを左右していた可能性が考えられる。そこで、まだ親しくない調査者に対して、短い発話を行い、園児同士では長めの発話が行われた。しかし、園児同士が調査中に話し始めるのも、調査者に対して長い発話を行うようになるのも、実は、調査が進んでいく中で、その場に慣れるということがあったのではないだろうか。そして、慣れさ

えすれば、調査者に対しても長い発話が行われるようになり、方言形も共通語形も混在させて使用し、対人別や内容別の基準では、発話の状況変化を捉えることができなかつたのではないだろうか。

つまり、今回の対象とした年長児達のスイッチングというものを捉えるためには、時間軸でもって、その発話の変化を捉えられるような方法が必要なのではないだろうか。

今後、言語の変化を時間軸でもって、記述できる方法を考えていくべきだろう。

4. 今後の課題

印象としては、対象の年長児達は、スイッチングして話をしているように受け取れるが、何を基準に言語をスイッチングしているのか、またそのスイッチングしている印象を与えるのは何であるのかということ自体も解明していかなければならない。

それと、幼児の慣れの早さというものも記述の中に含められるような方法を考える必要があるだろう。

そして、幼児の段階では、方言形と共通語形とが混在した形で言語を構成している可能性も見えてきたが、この状態が、方言形にどのような影響を与えるのかということも興味ある事柄である。

基本的には、学校教育の中で、方言形と共通語形の区別を意識させられていくわけであるが、単に学校教育やメディアの影響という単純な状況でなく、言語を習得していく自然な流れの中で、既に方言形と共通語形とが混在した環境にいるということが、その土地の方言の変化と大きく関わっていくのだろう。つまり、幼児の言語を観察することで、その土地の方言がどうして、このような変化を見せたのかということも考えることができるだろう。

注

- 1) 幼児たちの敬語形は、デス・マス形のみで、最初に自分の名前を言うところ以外では、ほとんど出てこなかった。それ以外は、決まり文句的な表現で、デス・マスが数回出現しただけである。
- 2) 発話量は、簡便さのために、文字起こしをした

際の文字数である。日本語は、漢字が複数音節吸収してしまうので、文字数で単純にその発話量を表すわけではないが、発話の長さの目安として見ていただきたい。

参考文献

高橋純・山下由紀恵（2013）「出雲方言と石見方言

の境界域調査」のための予備調査結果の分析とその方法の検討（1）」『島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要』51. pp.63-71.

山下由紀恵・高橋純（2013）「出雲方言と石見方言の境界域調査」のための予備調査結果の分析とその方法の検討（2）」『島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要』51. pp.73-76.

（受稿 平成25年11月29日，受理 平成25年12月12日）